

# 第4章 ベルリン-バグダッド-リオ



## アラン・リビエッツとの対話 Alain Lipietz

アラン・リビエッツは、レギュレーション学派の経済学者として、また緑の党のエコロジストとして、広く知られている。

フランスのレギュレーション学派については、日本でもすでに紹介されており、あらためて詳しく説明する必要はないだろう。資本主義は、たんなる市場の均衡によってではなく、さまざまな矛盾の調整(レギュレーション)によって機能している。たとえば、戦後の日本でいえば、資本と労働の間の矛盾は、経営者と労働組合の間の春闘を中心とするゲームのルールによって調整されてきた。このような調整の様式に着目して資本主義のダイナミクスを比較分析するのがレギュレーション学派の共通の視点である。

ただし、エコロジストでもあるリビエッツの視野はそれだけに限られず、人間と自然の関係の矛盾をいかに調整するかとい

う問題をも含んでいる。また、ラカン派精神分析の方法を用いてフェミニズムの立場からラシーヌの悲劇「フェードル」を分析してみせもするこの才人が、男性と女性の関係の矛盾の新しい調整のありかたに大きな関心を寄せていることも、付け加えておくべきだろう。

リビエッツは1947年に生まれ、理工科学校と土木学校を卒業するというエリート・コースを歩みながらも、68年5月革命の世代として今日までラディカルな立場を貫いてきた。かれは緑の党のメンバーとしてパリ近郊の地方議会に議席を持っているが、エコノミストとしてはパリの数理経済計画予測研究センター(CEPREMAP)にオフィスを構えている。このインタビューは、ありとあらゆる資料に埋もれんばかりのそのオフィスで行われた。

浅田 一九八九年の東欧の民主化から九一年のソ連崩壊にいたる激動によって、東西の冷戦は終結し、それによって歴史は終わった、という見方があります。しかし、その後さまざまな矛盾が噴出してくるのを見ると、逆に、冷戦下で宙吊りになっていた歴史がいよいよ再開されたのだ、と考えることもできるでしょう。とりわけ、あなたが『ベルリン・バグダッド・リオ』（邦訳・大村書店）で分析されたように、東西の冷戦の終結が残した負の遺産の問題があり（ベルリン）、激化する南北問題があり（バグダッド）、またそれと密接に結びついた地球環境問題（リオ）がある。このような状況を世界史的にどうとらえるべきか、あらためてお考えをうかがいたいと思います。

リビエツツ たしかに、八九／九一年は「歴史の終わり」ではなく、私たちは新たな問題に直面しています。にもかかわらず、それが二つの重要なサイクルの終わりだったということは、やはり確認しておくべきでしょう。

第一のサイクルは一九一七年のロシア革命に始まる中央集権型の社会主義のサイクルですが、それはまた、南側でいえば、そういうモデルに基づく植民地解放と発展のサイクルでもあり、さらに、西側でいえば、私たちがフォーダイズムと呼ぶ発展のサイクルでもあった。そういうサイクルが全体として終わり、世界的な危機をもたらしているのです。

第二のサイクルは一八世紀の啓蒙主義に始まるもので、技術的進歩と生産力の増大が社会的進歩と生活の向上につながるはずだという信念を基盤とするものです。この長期的な進歩主義のサイクルが終わったということは、いつそう大きな危機を招かずにはおかないでしょう。

浅田 それらの終わりの兆候は六〇年代末から七〇年代初めにかけてすでに現れており、八九／九一年はその最終的な確認だったのではないかと思うのですが。

リビエツツ その通りです。もう少し詳しく見ていけば、そのことが明らかになるでしょう。

まず、一九四五五年の第二次世界大戦の終わりによって、ソ連型の社会主義が東欧圏に広がります。また、植民地解放によって独立した国々のなかにも、そのような中央集権型の発展モデルを採用するところがたくさんありました。それらの地域は、それまでは農奴制に近いような前近代的段階にあつたわけで、国家の指導による加速された近代化が一定の役割を果たしたことは認めておかなければなりません。しかし、そのような加速された発展にはあまりにも無理が多く、七〇年代初めまでに事実上終わっていたと言つてよい。七三年のチリのクー・デタをひとつの終止符と考えることができるでしょう。

他方、四五年は西側においては私たちのいうフォーダイズムの始まりでもありません。これは、労働者がテラー・システムのような機械的管理を受け入れるかわりに、それによる生産性の上昇に見合った賃金の上昇を獲得するという調整様式に基づいた発展のモデルであり、七三年の石油ショックにいたるまできわめて急速な経済成長を実現しました。しかし、これもまた七〇年代には危機を迎えることになる。それはたんに石油ショックのためだけではなく、テラー主義的な少品種大量生産や機械的労働管理、そして一国単位での生産性分配メカニズムが限界に達したからです。

実際、これらの危機は、いずれもまず第一に国家の危機であり、それをもたらした重要な要因のひ

とつとして経済の国際化をあげておかなければなりません。旧社会主義諸国は国家の保護主義的障壁の内部で発展をとげてきたのですが、その障壁が取り除かれたとたんに壊滅状態に陥ったのです。他方、フォーダイズムの妥協も、一国内で分配された所得が一国内で消費されるかぎりにおいてうまく機能していたわけで、国際化によってそれもまた程度の差はあれ危機に陥ったのです。

このように、これらの危機は同時的であり、七〇年代初めに現れたそれらの危機が八九／九一年に最終的な終止符に到達したと見るべきでしょう。

浅田 このような経済の国際化——ひいてはグローバリゼーションは、地球環境問題のような形で、あなたの言われる第二のサイクルの危機にも関係しているわけですね。ここでもまた、六〇年代の終わりには公害問題などを通じて地球環境の有限性が強く意識されるようになり、七三年の石油ショックで資源の有限性も明らかになって、現在の諸問題が予告されていたと言えるでしょう。

リビエツツ まさにその通りです。多くの場合国家によって組織された技術的進歩と生産力の増大が、必ずや社会的進歩と生活の向上につながるはずだという信念は、無限に開かれた環境を前提にしていた。いくらでも資源を供給してくれるとともに、いくらでも廃物や廃熱を吸収してくれる環境です。たしかに、廃物や汚染の問題は昔からあったのですが、全体として見たとき、人類の社会は大きな自然のほんの一部にすぎず、それらの問題が顕在化するにはいたりませんでした。しかし、今や世界は閉じられており、生産や消費にともなう負の効果も自分たちに降りかかってくると考えなければならぬのです。

しかし、経済のほうはまだ地球規模のバランスを達成するところまではいっていません。むしろ、国際化によって国家間の競争が激化し、一方では徹底的な機械化、他方では低賃金のもとでの労働集約化が進んでいるわけですが、どちらの場合でも、生産性の向上は生活の向上と結びつかないことが多く、しかも、全体として地球環境問題を悪化させているのです。

このように、技術的進歩と社会的進歩が分離してしまい、進歩主義が破綻したということは、一八世紀の啓蒙主義に始まる長いサイクルの終わりを意味します。そして、このような分離のもとで、社会主義にかわって希望を担うものとして現れてきたのが、政治的エコロジーなのです。そこでは、進歩主義を超えて歴史の意味<sup>アップ</sup>方向<sup>ダウン</sup>を逆転することが問われている——技術の進歩から出発して自動的に生活の向上を導き出すのではなく、よりよい生活のためにどの技術が適当でどの技術が不適当かアセスメントを行うというように。

そして、そう、それはやはり六〇年代の終わりにすでに現れていたと言えるでしょう。

浅田 ちなみに、あなたは六八年の五月革命の世代に属しておられますが、六八年はその点でもやはり大きな切断点だったと思われませんか？

リビエツツ ええ。それは西側の世界ではフォーダイズムに基づく大量生産・大量消費社会に対する根源的な異議申し立てであり、すでにエコロジカルな要素を多分に含んでいました。また、東側ではチェコスロヴァキアのプラハの春（ただちに弾圧されたとはいえ）や中国の文化大革命（毛沢東や林彪らの政治的意図は別にして）に見られるようなソ連型モデルへの異議申し立てがあったことも忘れ

てはなりません。そう、その意味で、六八年は終わりの始まりでした。

浅田　そして八九／九一年は終わりの終わりだった。  
リビエツツ　その通りです。

### ベルリン——「壁」の崩壊の負の遺産

浅田　さて、私たちはその後さまざま問題に直面しており、あなたはそれをベルリン、バグダッド、リオの三つの地名で象徴されたわけですが、それらの問題をあらためて鳥瞰してみてもどうでしょう。リビエツツ　そうですね。八九年から九二年にいたる時期には、今世紀末、さらには来世紀前半を支配するであろう諸問題が一挙に現れてきたわけで、それを分析することはきわめて重要な課題です。まず、ベルリン、つまり東西対立の終わりがあげられます。もちろん、それはソ連型社会主義の全面的な敗北をもって終わりました。これは実際にはきわめて硬直的で非効率な国家資本主義にほかならなかったわけで、それを保護していた国境の壁が開かれたとたん、壊滅状態に陥ってしまった。いまのロシアはブラジルよりはるかに遅れた段階にあると言っているくらいです。

他方、それはアメリカに代表される資本主義の勝利だと言われたわけですが、私の見るところでは、これは誤りで、実際にはアメリカも同時に敗北を喫したと言わなければなりません。アメリカに体现されるフォーダイズムは、四五年から七三年までの時期にはたしかにヘゲモニーを握っていたものの、その後、先に述べた通り、深刻な危機に直面し、資本主義圏のなかでこの危機に対するさまざまな解

決方法が試みられてきました。

そのひとつはアメリカやイギリスでレーガンやサッチャーが導入した保守的な新自由主義政策で、テラー主義的な機械的労働管理を維持しながら、労使の妥協による分配ルールを排除して労働市場を競争的にしてゆくという道です。これをネオ・フォーダイズムと呼ぶこともできるでしょう。

他方、ドイツや日本では、テラー主義的な機械的労働管理を超えて労働者を生産過程に積極的かつ柔軟に参加させ、分配に関しても労使の妥協を前進させるという、まったく別の道がとられました。このなかには、スウェーデンのように労使の妥協がきわめて進んだ例もあれば、日本のようにその点ではあまり進んでいると言えない例もあって、前者はヴォルヴォイズム（あるいはヴォルヴォの本社の所在地の名にちなんでカルマリズム）、後者はトヨタイズムと呼ばれています。これらの差は、アメリカ型のモデルとの差から見れば、それほど大きなものではありません。

そして、明らかに、八〇年代を通じて、アメリカ型のモデルはドイツ・日本型のモデルに決定的な敗北を喫したのです。いまアメリカはクリントン政権のもとで再建にとりかかろうとしている。しかし、アメリカの産業は空洞化し、社会は荒廃し、対外的にもアメリカ一國で第三世界の債務総額の半分を超える債務をかかえているわけで、再建の道はきわめて厳しい。そして、アメリカがそれらの問題を克服できないとすれば、アメリカはこれからの世界において大きな不安定要因になると見なければなりません。

浅田　別の角度から見れば、第二次世界大戦に敗れることで民生部門に特化することを強いられたド

イツと日本が、軍産複合体をかかえて恐竜のように進化の袋小路に入ってしまったアメリカとソ連を追い抜いてしまったわけで、歴史のアイロニーと言うほかはありませんね。

リビエツツ まったくです。こうしてソ連とともにアメリカも力を失ったことにより、勝利したはずの西側において新たな分裂が生じ、ドイツと日本を中心とするブロックが自立性を強めてきています。しかし、これらのブロックも多くの問題をかかえているには違いありません。

たしかに、日本からみて社会主義圏の崩壊は遠いところで起こっている。しかし、日本が朝鮮半島に位置しており、中国がロシアのような混乱状態に陥ったとしたらどうか。それがドイツの状況です。ドイツは八九年には再統一の達成と東欧の再建を簡単に進めることができると思っていたのが、今では混乱が広がってゆくを見守るばかりなのです。たとえば、ドイツはスウェーデンやフィンランドとともにバルト三国を含めた「バルト共栄圏」を構築できると思っていたのが、実際に起こったのは正反対のことで、旧ソ連の崩壊とともに、「バルト共栄圏」どころか、フィンランドやスウェーデンの経済すら危機に瀕しているというありさまです。しかも、他の地域では問題はいつそう深刻なのです。

もちろんこれに関してはドイツ自身の責任が大きい。第二次大戦後、アメリカがヨーロッパや日本の復興を援助したときは、それまでの債務の帳消しやマーシャル・プランのような大規模な援助のほか、保護主義的な障壁や通貨の非交換性のような垣根がとりあえず認められた。ところが、ドイツは巨大な格差のある東西の経済を直接接続することで東側の経済を荒廃させてしまい、しかも、それを復興するための資金が必要だというのに、あくまで高金利を維持しつづけている。そして、このよう

なエゴイズムが必然的に招いた混乱に自らおびえているのです。

浅田 第二次大戦後の復興にあたって行われたことは、だいたいケインズが第一次大戦後に提案していたことですね。そのケインズの提案を無視したために、結局は第二次大戦にいたるような事態を招いてしまった。その反省が第二次大戦後に生かされたわけです。ところが、今またそれが忘れられ、第一次大戦後のような愚行が繰り返されるとしたら、これまた歴史のアイロニーと言うほかありませんね。

リビエツツ まったくです。いずれにせよ、このような混沌を目の前にして、ヨーロッパは新たな境界線で自らを守ろうとしています。どこまでがヨーロッパに含まれ、どこからが排除されるかをめぐって、熾烈な闘争が繰り広げられているのです。

私は『ベルリン・バグダッド・リオ』のなかで、ヨーロッパという帝国の境界がどうなるかを論じています。大まかにいって、ヨーロッパの東の境界は、旧東ドイツとポーランドの間を通ることになるでしょう。チェコはヨーロッパに含まれるけれど、スロヴァキアは含まれない。スロヴェニアは含まれるけれど、旧ユーゴスラヴィアの他の地域やギリシアは含まれない。イタリアはいまのところ全体としてヨーロッパに属しているものの、南部は北部にたかっているだけだという北部同盟などの主張にみられるように、分裂を引き起こしかねないほどの格差があり、その場合は南部は外にはじき出されることになる。コルシカもフランスから離れていくかもしれない。スペインでも、カタルーニヤとその向こうの間で分裂が起こる可能性があり、セピリアの万国博覧会はそれを押しとどめようとする

試みだったと言えるかもしれない。このように、ヨーロッパの境界は再定義される途上にあり、その揺れ動く境界をめぐるって、人種差別を含むさまざまな問題が燃え上がっているのです。

浅田 たたとえば、スロヴェニアのスラヴォイ・ジジエクが言っているように、旧ユーゴスラヴィア各国はそれぞれヨーロッパの最後の砦として外部の「野蛮」と戦っているつもりなんです。

リビエツツ まさにその通りです。繰り返しますが、ヨーロッパで起こっているこのような混乱が東アジアでも起こらないという保証はない。中国の経済的近代化はロシアよりうまく進んでいるかに見えますが、そこにはさまざまな潜在的問題があり、それが噴出して中国がロシアのような状況になれば、大変な混乱が予想されます。以上が、ベルリンに象徴される東西対立の負の遺産の問題です。

### バグダッド——湾岸戦争の意味

浅田 それでは、第二の問題、バグダッドに象徴される南北対立の激化の問題に移りましょう。

リビエツツ 九一年の湾岸戦争は、メキシコの作家カルロス・フエンテスの言葉を借りれば、「冷戦後の最初の熱い戦争」でした。東西の緊張が緩和したかと思う間に、今や世界の主要な対立軸となった南北の緊張が爆発したわけです。

浅田 第二次大戦後、南の世界でも植民地解放と発展の夢が語られた。あなたが先に言われたように、東側の援助のもとに社会主義モデルを採用する国々もあったし、西側もそれに対抗して開発援助を行ったりしたわけです。しかし、七〇年代に入ってその夢も徐々にしぼんでいった。そして、東西冷戦

の終結とともに、北が南を見放したことが露呈され、また、北の発展モデルに幻滅した南の多くの国々も北との関係を望まなくなりました。

リビエツツ そうです。しかし南の一部には、石油のような天然資源や、きわめて安価な労働力ゆえに、北にとってまだ有用な地域があり、それとどう関係を維持するかが問題となったのでした。

一般に、帝国が「野蛮」な辺境をコントロールするには二つの方法があります。ひとつは直接介入による方法、もうひとつは辺境との間に設けた独立の緩衝国を媒介とする方法です。第二次大戦後をとってみても、アメリカはヴェトナムをはじめとする地域に直接介入してきたわけです。中東でいえば帝政下のイランのような緩衝国を通じてコントロールを図ってきたわけです。それは今も変わっていない。ただ、大きな変化もあります。まず、アメリカはもはや単独で介入を行えなくなったので、国連による見かけ上の正当化を必要とし、また日本やドイツなどによる戦費の分担を必要とするようになった。次に、緩衝国としてアメリカに支えられていたイランがイスラム革命で「野蛮」化したあと、新たな緩衝国としてアメリカに支えられイランと戦ったのがイラクだったにもかかわらず、そのイラクが勝手に行動し始めるや否や、アメリカはそれを打倒しようとしたわけで、そこにはアメリカおよび西欧が自らの作り出した「フランケンシュタイン」を破壊しようとするという倒錯が現れてきている。湾岸戦争はこのような変化を集約して示した点で画期的なものでした。

さて、言うまでもなく、湾岸戦争は石油のための戦争です。あらゆるタテマエにもかかわらず、もしクウェートに石油がなかったら、アメリカがあのような戦争を行わなかったことは明らかなのです。

しかし、それではだれが石油を必要としているのでしょうか。確かに、日本が石油のほとんどを輸入に頼っていることは事実です。けれども、それ以上に重要なのは、日本やドイツが、七三年の石油ショックの後、フォーダイズムを克服する過程で、省エネルギー型の経済への転換を推し進めてきたのに対し、アメリカは依然としてエネルギー浪費型の経済にとどまっているということです。アメリカはGNP一ドルにつき日本やドイツの倍以上のエネルギーを消費している。その意味で、だれよりも石油を必要とし、省エネルギーやそれによる環境対策に反対しているのは、アメリカなのです。

他方、七〇年代の危機から脱出する過程で日本やドイツに敗北し、今やジャンボ・ジェットやコンピュータくらいしか輸出するものなくなったアメリカに、ひとつだけ圧倒的な競争力をもった商品がある。それは軍事力です。アメリカは、今後、南の「野蛮」な辺境から北の帝国を守るために、自らの軍事力が不可欠であることを宣伝しなければならなかった。そして事実、クウェートやサウジ・アラビアのみならず、日本やドイツから巨額の戦費を引き出すのに成功した。一方では国連によって正当化された「世界の憲兵」として振る舞おうとするアメリカが、他方では純然たる「傭兵」として振る舞ったのです。

このように、経済的に破綻しながら唯一の超大国として振る舞おうとするアメリカは、これからの世界において大きな不安定要因になるでしょう。しかし、湾岸戦争がアメリカから見て「成功」だったとしても、それはむしろ例外であり、事態がそううまく運ぶものではないということは、ソマリアの例を見るだけで明白です。アメリカのヘゲモニーが、湾岸戦争直後に一種のインディアン・サマー

(小春日和)を経験したとしても、それは長続きするものではありません。実際、冬に逆戻りしようとしているというのが現状でしょう。

他方、この戦争によって、アメリカをはじめとする北がグローバルな共通利益という概念を汚してしまったこと、また、南がある限度を超えた自立と発展は許されないのだという認識を新たにしたこととは、広範な影響を持たずにはおきません。とくに、それは地球環境問題にも大きな影を投げかけることになるでしょう。

浅田　そうですね。そこで、リオに象徴されるこの第三の問題に目を向けたいと思います。

リオ——「地球サミット」はなぜ貴重な第一歩を踏み出せなかったか

リビエツツ　この問題こそもっとも重要なものであると私は考えています。技術的進歩に支えられて肥大化してきた人類の社会システムは、とうとう地球環境の壁に突き当たり、このまま行けばエコロジカルな危機を招くことが確実な状況になってきている。これこそグローバルな共通利益の概念に基づく国際的な対応を要求する問題なのであり、一九九二年六月にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開かれた「環境と開発に関する国連会議」——いわゆる「地球サミット」はそうした対応の第一歩となるべきものでした。

しかし、この問題は南北問題と密接に関連しています。とくに、「地球サミット」の準備交渉が湾岸戦争と同じ時期に行われたことは、意味深長だったと言わなければなりません。この戦争によって、

アメリカを先頭とする北は、グローバルな共通利益という概念を——ゲーム理論の言葉で言えばこの概念に基づく議論のレピュテーションを、すっかり損なってしまったのです。実際、二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの排出を制限すべきだというヨーロッパや日本の立場に加わることをアメリカが拒否したのは、湾岸の状況が戦争へと傾斜してゆく秋のことだった。ブッシュ大統領が、依然として石油多消費型の今後二〇年間のエネルギー政策を世界に向けて発表したのは、イラクへの空爆が始まって二日後のことだった。当然、それまで互いに態度を異にしていた南の諸国は、反アメリカの一線で団結することになりました。

浅田 これは不毛な構図だと言うほかありませんね。

リビエツツ まったくです。問題をはつきりさせるため、温室効果をめぐる問題を取り上げてみましょう。そこには、南北の軸、そして、何か対策を講じようとする国と何もしたがない国という軸があります。

まず、温室効果で気温が上がり、海面が上昇したときに、被害を受けるのはどこか。たとえばアメリカのような北の国は、ルイジアナなどの一部を放棄して、農業の重心を北へ移せばいいわけですが、バングラデシュのような南の国は、人口の密集したデルタのかなりの部分を失い、農業に壊滅的な打撃を受けることになってしまいます。つまり、主な犠牲者は南です。他方、主な責任者が北であることははつきりしている。もちろん、南も、農業によって、また急速な工業化によって、責任の一端を担うようになってきてはいるものの、それは二義的なものにすぎないのです。そこで、主な責任者で

ある北は、しかし南にもその一端を担わせようとし、主な犠牲者である南は、共同で何らかの対策をとることが自らの利益にかなうと知りながらも、まず北が主な責任者であることを強調するわけです。

それでも、何らかの対策を講じようとするグループが南にも北にもあります。南でいえば、今ふれたバングラデシュのような国々がそうであり、北でいえば、ヨーロッパの多くの国々や日本など、南が不安定化することで失うものが多いグループがそうです。ところが、そのような対策によって失うものが多いグループはそれに反対する。南でいえば、急速な経済発展を推し進めてきた国々がそうであり、マレーシアのマハティール首相などはその好例です。北は少なくとも一五〇年というもの何も考えずに経済成長を遂げてきたのだから、われわれにも一五〇年は勝手に経済成長を遂げる権利がある、というのが、こういう「環境のフセイン」たちの言い分です。そして、北でいえば、どこまでもエネルギー浪費型の経済にこだわるアメリカこそが、そのような対策に反対している。その意味においてブッシュ大統領もまた「環境のフセイン」だったのです。

これは温室効果の問題にかかわる状況ですが、一般的にもだいたいこういう状況だと言っていいでしょう。そして、そこで指導力を発揮すべきだったヨーロッパと日本が、湾岸戦争でアメリカに追いつくことにより、グローバルな共通利益の概念を自らも踏みにじってしまったのです。このような状況のもとで、中国は北京での会議においてバングラデシュからマレーシアにいたる南の国々の合意を形成するのに成功しました。北のみなさんはグローバルな共通利益について立派な高説を垂れておられるけれども、主な責任者が北であり主な犠牲者が南であることをわれわれは知っており、あなた



がたが何の対策も講じないかぎりはわれわれも何もするつもりはない、というわけです。

このような流れをふまえて開かれた「地球サミット」があまり多くの成果を生み出せなかったのは、驚くにあたりません。何らかの対策を取らなければならないことをだれもが認め、その点でアメリカの理論的立場が否定されたのはいいとしても、実際になされたことは少しだけなのです。ただし、ひとつだけ注目に値するのは、南北のNGO(非政府組織)の活躍ぶりでした。おそらく、真にグローバルな立場からエコロジーを推進していく役割を担うもののひとつが、これらのNGOでしょう。

### 「北」と「南」の相互貫入と矛盾の激化

浅田 こうしてみると、グローバルに対処すべき環境問題であるにもかかわらず、地政学的な分裂がそこに大きな影を落としていると言わざるを得ませんね。

リピエッツ そう、すべては、北における三極化、そして南北の分裂の影響を受けています。まず、フォーダイズムの危機をうまく克服することができず、依然としてエネルギー浪費型の経済を抱えているアメリカ・ブロックと、それよりはうまく危機を克服したヨーロッパ・ブロックおよび日本ブロックへの三極化がある。そして、そのような北全体に対する敵意が、荒廃を深める南で急速に広がっている。このような分裂が、地球規模のエコロジカルな危機へとわれわれを駆り立てているのです。これは、「歴史の終わり」というより、「歴史の加速」と言うべき状況でしょう。野蛮と分裂の力が勝つか、理性と協調の力が勝つか、そのスピード・レースはますます加熱してきている。そして、残念

ながら今のところあまり楽観的になれる状況ではないのです。

浅田 ここで北のわれわれが認識すべきことのひとつは、現代の世界はもはや北と南という単純な構図に収まりきらないということではないでしょうか。実際、移民の流入やスラムの増大などによって、言ってみれば北の内部に南が入り込んできている。南の問題はもはや「かれら」の問題ではなく「われわれ」の問題でもあるのです。

リピエッツ たしかにそうですが、そのような第三世界化はいたるところで同じように起こっているわけではありません。ドイツや日本などでは、社会のほぼ全体が、ある程度の一致を見いだしているように思われます。もちろんそれはだれにとつても利益になる一致ではありませんが、資本主義は決して平等な発展のモデルではないわけで、それは当然のことです。たしかに、ドイツや日本でも、移民や女性の日雇い労働者やパートタイム労働者などがきわめて従属的な位置におかれているには違いないにせよ、かれらとて社会から排除されているわけではないのです。

ところが、フォーダイズムの危機をうまく克服することができず、社会の統一を維持すると称していた国家が無力化してしまったところでは、人口の一部が文字通り社会から排除され、その意味で真の第三世界化が生じている。これは私がすでに一九八五年に「奇跡と幻影」(邦訳・新評論)のなかでアメリカの「ブラジル化」と呼んで分析しておいた現象です。

そもそも、南の国というのは、金持ちがいない国ではなく、金持ちが貧乏人より無限に豊かな国、その意味で極端な両極化が生じている国です。国家が債務に苦しんでいるとしても、ごく一部の金持

ちは北の金持ちより豊かでさえある。他方、その分け前にあらずからない貧乏人は、社会から完全に見放され、ブラジルの路上の子供たちのように殺されてもだれの注意も引かないくらいなのです。アメリカで起こっているのは、まさにこのような両極化なのです。

もちろん、アメリカのなかにはつねに移民による第三世界がありました。しかし、かつては、アメリカにやって来たメキシコ人も、そのうち成功して豊かになるというアメリカン・ドリームを信じていることができた。それが今は、新参者ばかりか、前からアメリカにいた白人さえ、失業して下手をする

とホームレスの境遇に身を落とす危険に直面しているのです。アメリカとメキシコの国境では、アメリカの企業が低賃金労働を求めてメキシコに工場を作るといった形で、アメリカがメキシコに滑り込んでいくと同時に、かつてはメキシコに特有だった低賃金や社会的排除の現象がアメリカの内部に入り込んでくるという、北と南の相互貫入を見て取ることができます。そして、それは国境だけではなく、アメリカ全体に広がった現象なのです。

こういう現象はヨーロッパでも起こっています。一方で、フォーダイズムの危機から脱出するため、労使の妥協を破棄し、労働市場の競争化を選んだ国々——イギリスやスペインなどが、ECの内部で新しい貧困を広げつつある。他方で、ECの東側に旧社会主義圏という巨大な「奴隷市場」が出現したため、そのような低賃金労働を安易に搾取しようという誘惑が生じ、アメリカとメキシコの間で生じたのと同じような現象を生みかねない状況にある。いわば、意図的な第三世界化と予期せぬ結果としての第三世界化が生じているわけです。このような差異を考慮に入れたうえで、そう、あなた

の言われるように、南の問題はもはや「かれら」の問題ではなく「われわれ」の問題でもあると言わねばなりません。

浅田 ちなみに、いま分析されたような状況のもとで、人種差別やそれに基づく移民排斥が目だつようになつてきており、これまた地域によつて事情が異なるとはいえ、全体として無視し得ない問題になつていと思うのですが。

リビエツツ 人種差別というのは複雑な現象で、経済的・社会的理由だけから説明することはできず、たとえば精神分析的なアプローチまで必要とする面をもっています。そのことを確認したうえで、あえて単純化して言えば、人種差別が激化するには二つの道があり、それぞれ「富者の人種差別」と「貧者の人種差別」を生むと考えられます。

第一のケースは、ドイツやオーストリア、そして日本のように、一体的に組織された豊かな社会に見られます。そこでは、社会の成員のほぼすべてが、交渉と妥協に基づいて経済成長の分け前にあずかる。ただしそれは、その権利をもつ社会の成員を厳密に制限したうえで話なのです。これが「富者の人種差別」です。

しかし、北の一部には、先に述べたような両極化が進行している国々があり、そこには、まだ多少は豊かだけれど、いよいよ貧民に転落しつつあって、自分より貧しい者を脅威と感じる——自分を引きずりおろすライヴァルであると同時に、自分の暗い未来を映す鏡でもあると感じる人々がいるのです。そこから生まれるのが、第二のケース、つまり「貧者の人種差別」です。いまイギリスやフラン

スで荒れ狂っているのは、まさにこの「貧者の人種差別」にほかなりません。かれらは、自分たちがすでに負け犬だと感じており、第三世界にとけ込んでいく運命におびえているのです。

浅田 私も、人種や民族をめぐる問題が激化するかどうかは、最終的には経済によって決まると思います。しかし、あなたの言われたように、そこには精神分析的な要素さえある。スラヴォイ・ジジエクなども、そのような視点からの分析を行っています。

リピエッツ そう、旧ユーゴスラヴィアで燃えさかっているのは「貧者のファシズム」の典型ですが、そこにはもつと複雑な要素もあります。旧ユーゴスラヴィアにはさまざまな人種や民族が入り混じって住んでいて、はつきりした線を引くことが難しい。だからこそ、危機になると、人種差別が発生するのです。

実際、心理的な危機において、人は自分が何ものであるかもはや断言できなくなるわけで、そこでの唯一の解決は「自分は他人のようではない」と断言することなのです。自分に何が欠けているかはわからない、しかし、他人が不当にも持っているものことはわかる、というわけです。これは一種の鏡のゲームであり、狂った結果を招かずにはおかないでしょう。

たとえば、さつきヨーロッパの境界が再定義されつつあると言いましたが、そこで排除されそうになった国は、自らあらかじめその排除を正当化するような行動をとる傾向があります。実際、ギリシアなどは、ギリシア固有の民族性やギリシア正教を強調するようになり、それにもなつて避妊や妊娠中絶への反対が強まったりもしている。いわゆる「文明圏」から排除されそうになった国が、自ら

進んで「野蛮」を選び取り、「これこそがわれわれのアイデンティティだ」と叫び始めるのです。もちろん私は西欧近代文明が絶対だなどとはまったく思いませんが、このような退行はどうみてもバカげていると思います。

浅田 むしろ、西欧近代文明を過大視し、そこから排除されることを恐れるあまり、自ら反対の極に走ってしまうのかもしれない。それにしても、こうして見てくると、現在の世界では、あなたが『ベルリン・バグダッド・リオ』で引いておられるテオ・アンゲロプロスの映画『こののとり、たちずさんで』に描かれたギリシアの国境のような状況が、いたるところに現れつつあると言わなければなりません。それはかなり悲観的な状況だと思ふのですが。

リピエッツ そう、しかし、悲観的になりすぎはいけません。世界は十分に豊かであり、北の内部の分裂や北と南の分裂を修復して、地球環境問題に取り組むことは、まだ可能なのです。

それには、南（今や東も含む）の国々に対して、第二次大戦後のマーシャル・プランのような政策を地球規模で行わなければなりません。まず、南の国々の債務を帳消しにしてやる必要がある。この債務のために、南の国々の多くが、国民に低賃金を強制し、環境を破壊しながら、無理な輸出攻勢を続けているのです。次に、低利の融資や贈与によって、これらの国々の発展を援助してやる必要がある。ただし、自国民の生活水準を高め、環境を保護しようとする国は、南北を問わず、そこから排除してよい。逆に、自国民の生活水準を高め、地球環境との関係で持続可能な発展をとげる国は、輸出に見合った輸入を必要とするはずで、そのような南の需要を世界的に喚起し、それによって世界経

済を浮揚させることが、長期的にみて望ましいのです。さらに、第二次大戦後アメリカがヨーロッパや日本の復興を助けるためにしたように、ある程度の保護主義によって、遅れた経済が進んだ経済に直接接続されることで荒廃しないようにしてやる必要がある。豊かな者は自制し、貧しい者が自らを守ることを認めてやるべきです。それが結局は世界経済全体の発展につながるのですから。このような政策によって現在の悪循環を好循環へと転ずることがぜひとも必要とされているのです。繰り返しますが、これはたんなる理想論ではありません。似たようなことは、戦後、アメリカとヨーロッパや日本との間で行われたことがあるのです。このようにして世界が分裂を克服し、多様性を積極的に協調利用できるようになってこそ、地球規模でのエコロジカルな危機への対応が可能になるでしょう。

### 政治的エコロジーの展開

浅田 実際、地球環境問題はもつとも重要な問題のひとつであり、世界が分裂を克服してこの問題に対応していくことが急務であると思います。

あなたが前に言われたように、かつて人間の経済社会システムは自然環境に比べてきわめて小さかったので、いくらでも資源を投入し廃物や廃熱を排出することができた。そういうリニアな図式に基づいて、システムを局所的にどんどん成長させていけばよかった。ところが、その結果、今では経済社会システムが自然環境に比べてかなり大きくなってしまい、人間の活動の影響がただちに自分たちにはねかえってくるようになった。つまり、システムは全体として閉じてしまい、地球規模での複雑

なフィード・バックを考慮しなければならなくなった。こういう条件のもとで現れてきたのが政治的エコロジーでしょう。その要点はどこにあるとお考えですか。

リビエツツ まず少し歴史をさかのぼってみましょう。資本主義が発展を始めたとき、それはただちにおおるべき社会的危機をもたらすとともに、地域レベルでエコロジカルな危機をも生み出しました。たとえば、ロンドンの都市化がいかにもひどい環境を生み出したかは、ディケンズの小説などに描かれている通りです。はきだめのような場所で極貧の生活を強いられる人々……。

さて、社会的に言えば、資本家に賃金労働者の生活を考慮させ、彼らを保護する制度的手段をとらないかぎりプロレタリアの消滅を通じて資本主義の解体がもたらされかねないことを理解させたのは、社会主義の闘争の偉大な成果でした。社会主義といっても、なにか理想的な状態をめざす社会主義ではなく、資本主義社会の中であって現実的に矛盾を克服しようとする運動としての真の社会主義です。浅田 ちなみに、それこそがマルクスによる共産主義の定義だったわけですね。

リビエツツ その通りです。さて、このような運動は、人道主義的な一部のブルジョワや医師たちと結びついて、いわゆる衛生学運動を生み出しました。かれらは、劣悪な都市環境を改善し、衛生的にしないかぎり、貧困や疫病によって社会が解体してしまうだろう、と警告しました。そして実際、居住環境の改善や上下水道の整備などによって、破局は回避され、たとえば、ワクチンのたぐいが開発される前に、古典的な疫病の多くが姿を消すにいたったのです。私は、このような衛生学運動こそ最初の偉大なエコロジー運動だったと思います。

浅田 ミシエル・フーコーはそういう衛生学運動のなかに社会を生物学的レベルにおいてまで管理しようとする権力の働きを見ているが、あなたはむしろそれを資本と労働の取引の上に成り立つ肯定的な運動と見るわけですね。

リビエツツ ええ。資本主義の初期の段階において、労働運動の最初の成果とほぼ同時に、過度の貧困による地域レベルでのエコロジカルな危機が資本主義によって考慮されるにいたったのです。さて、この種の貧困による地域レベルでのエコロジカルな危機は、現在、南の世界のいたるところで、急速に進展しています。実際、サンパウロのスラムも、マニラのスラムも、同じように、過度の貧困による社会的・環境的な危機に直面している。そこでは、社会面での闘争と環境面での闘争が、貧困に対する闘争において統合されることになるのです。このことはリオでの「地球サミット」でもとくにNGOによって強調され、「最大の汚染は貧困である」というスローガンを生み出しました。しかし、資本主義の初期の歴史について見たとおり、これは新しい現象ではない。それが解決され得るかどうかはわからないにせよ、どうやって解決されるべきかはわかっている。労働者の社会的権利を認め、公的資金を投入して居住環境の改善と衛生の徹底を図るといった政策を取らなければならぬのです。

浅田 それはいわば古典的な問題の古典的な解決ですね。

リビエツツ そうです。さて、新しい問題は、貧困ではなく富による危機、しかも地域レベルではなくグローバルな危機が現れてきたということです。北の国々の富、そして南の国々の一部の発展の結果として、経済活動の効果が全体として地球環境の容量を超えるようになってきたのです。これはいくつかの例があります。たとえば、オゾン層の破壊は、幸いにもまずオーストラリアのような豊かな国に影響を与えるため、早くから注目を集めました。これが最初にソマリアかどこかに影響を与えるのだとしたら、だれ一人気にもしなかつたでしょう。それよりも範例として意味深いのは、二酸化炭素などのもたらす温室効果による地球温暖化です。それは豊かさのもたらす危機でありながら、まず南の貧しい国々に影響を与えるからです。

このようなグローバルな危機に対して北側をとるマルサス主義的な反応はこうです。もうみんなに席がなくなったのだから、新参者を制限しよう。これは私が「アドック船長症候群」と呼ぶものです。マンガの「タンタンの冒険」に出てくるアドック船長は、月に向かうロケットの中で禁煙を強いられていたところが、もぐりの乗客がいたのを発見して、「せっかくわしが禁煙して酸素を節約していたのに、こいつらがその分を吸ってしまったのでは何にもならんんじゃないか！」と叫ぶ。そんな乗客はどこか砂漠の惑星にでも置き去りにしたほうがいい、というわけです。それと同じように、北側は、南側の人口爆発と発展さえなければ、みんなに十分なだけの酸素があり、二酸化炭素の排出も安全なレベルに抑えられるのに、と言うのです。温室効果のみならず、他のエコロジカルな危機に関しても、同じことです。

北側がこのような態度を取りつづけ、当然それに納得しない南側が勝手な発展をめざしたとすれば、事態は破局的なものになるでしょう。それは相互殲滅戦争への道です。実際、二〇年以内にこの問題

が解決されないかぎり、最悪の場合、来世紀初頭には、気候の変動や海面の上昇などによる大規模な移民が始まり、それに対する暴力的な対抗手段が取られるようになるでしょう。最初は北の国が直接巻き込まれることはないとしても、たとえば、バングラデシュ、インド、パキスタンといった国々で深刻な危機が発生する恐れがあり、それはやがて北にも波及することになるのです。これは人類にとって重大な物質的危機であると同時に道徳的危機でもあります。それは野蛮への退行にほかならないのです。

### グローバルに行動し、ローカルに考えよ

浅田 いま言われたように、ローカルなレベルからグローバルなレベルまで、エコロジカルな危機は多様な広がりをもっています。それに対して、NGOの活動、国際機関によるコントロール、あるいは市場メカニズムへの内部化（たとえば譲渡可能な二酸化炭素排出権の割り当て）といったさまざまな対応が考えられるでしょう。そこではどのような役割分担を考えることができるでしょうか。

リビエツツ 南の国々における地域レベルでの危機に関するかぎり、NGOが重要な役割を果たしてきましたし、これからも果たしてゆくでしょう。そのためには、NGOに対する自国からの援助や国際的な援助が必要です。ここで肝心なのは、援助がこれらのNGOに直接与えられることです。前にも言った通り、南には北のわれわれよりはるかに豊かなエリートがおり、こうしたエリートのコントロールする国家に与えられる援助はほとんど何の効果ももたらさないので。

グローバルな危機に関してまず言っておきたいことは、それが最重要課題であるという認識を持ち、何が最適な手段かわからない以上は考えられるあらゆる手段を取るべきだということです。たとえば温室効果の問題でも、二酸化炭素を大量に出さない技術の開発と普及、そのための課税や割当制度などを、あらゆるレベルで併用してゆくべきでしょう。

とくにグローバルなレベルで言えば、国別に二酸化炭素排出量を割り当てることが望ましいという点で、リオに集まったNGOの多くが合意しました。二〇四〇年には人口が百億人になるわけだから、一人あたり年に約五〇〇kgの炭素換算量しか排出できなくなる。たとえばそれを基準にして、国別の人口に応じた排出量を決めてゆくのです。さて、北の国々はすでにその割当量をオーヴァーしており、ヨーロッパ諸国は今の二トンを超えて、アメリカにいたっては今の五トンを一〇分の一にしなければならぬ。他方、南の国々にはまだ割当量に達していないところがある。そこで当分のあいだ北の国々に猶予を与え、自国の排出量を減らすよう努力する一方で、南の国々から排出権を買えるようにしてやればいいのです。そうしないと、南の国々は、早く割当量まで到達しないと損だとばかりにエネルギー消費を増やしてしまいかねない。余分な割当量売れるようにすることで、北の国々のみならず南の国々にもエネルギー節約のインセンティブ（誘因）を与えることができ、そして、北から南への直接の資金の流れを生み出すことができます。この解決法はインドのアニル・アガルワルのような人々によって提案され、広く検討されてきました。ただし、このように大気圏に関する権利をいわば原材料として市場化するというのは重大なことなので、十分慎重でなければなりません。

それは南のものではありませんが、それを買い取る北ははるかに強い交渉力を持っているのです。たとえば、南の国が債務を返済するために割当量のすべてを一拳に売ってしまうなどということになればどうしようもないでしょう。

浅田 現在のよう南北格差のもとでは、北による地球環境の囲い込みの可能性さえありますからね。譲渡可能な排出権の導入は、いままで市場の外にあった要素を市場に内部化することによる解決の一種で、たしかにひとつの有効な解決かもしれませんが、あなたの注意されたように、市場化によってすべてが解決できると考えるのは危険でしょう。

リピエッツ ええ。とくに南に関してはその点に注意が必要です。そこでは生活の大部分が市場の外で営まれており、市場を前提とする経済的手段を講じていても意味がありません。たとえば、タンザニアの女性は何キロ四方にもわたって薪を拾い集め、日本の女性の三〇倍のエネルギーを料理に費やしている。それをやめさせるには、薪なり二酸化炭素なりに課税したってためなので、効率のよいコンロを与えればそれですむことなのです。

浅田 そういう生活様式に即した具体的な援助が必要だということですね。

リピエッツ そうです。他方、北に関してもある意味での生活様式の変革が重要だと私は考えます。たしかに、北の国々は省エネルギー技術によって二酸化炭素の排出量を減らすことができるでしょう。しかし、それとともに、物質的成長ではなく、労働時間の短縮、すなわち自由時間の獲得を主要な目標とする発展様式を採用することによってはじめて、問題の解決が可能になるのです。たとえば、日

本は省エネルギーに関して世界に冠たる成果をあげてきました。しかし、労働時間の短縮こそが生産性上昇分の主要な再分配形態となり、社会の進歩の指標となるような発展のモデルを採らないとしたら、いかに日本でも今の排出量を四分の一にまで削減することは困難でしょう。北の国々はいま大きな変革を迫られている。生産方式を技術的に改善するだけではなく、生産の目的として購買力の増大ではなく自由時間の増大を指標とするようにしなければならぬのです。

浅田 たしかに日本はフォーダイズムを克服するうえでひとつの有効なモデルを提供してきたわけですが、労働時間の短縮に関するかぎり、もうひとつのドイツ・モデルにはるかに後れをとっています。その意味で、それはとくに日本にとって重要な課題であると言えるでしょう。

さて、さまざまなレベルでの問題とその解決について論じてきたわけですが、グローバルな問題とローカルな問題の間にはずれや矛盾も存在します。そこで「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」というスローガンも生まれましたが、それですべてが解決されるわけではないでしょう。この点についてどうお考えですか。

リピエッツ 私が最近の著書『緑の希望』のなかで主張したのは、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」というのは神秘的なエコロジーのスローガンに過ぎず、真に現実的なエコロジーのスローガンは「グローバルに行動し、ローカルに考えよ」というものでなければならぬということです。実際、私たちヨーロッパのエコロジストは、世論に訴えて権力を獲得するための神秘的な政治ではなく、とくに地方レベルにおいて責任をもって権力を行使するための現実的な政治を考える段階に入っ

おり、夢物語を語っているだけではすまされぬ。一人一人の人間が自らのローカルな行動のグローバルかつ長期的な影響を考慮して動いてくれるならそれほど結構なことはいないけれど、実際には人間はエゴイストで短期的な視野しか持たないというシニカルな前提から出発しなければならないのです。これがいわばレアルポリティク（現実政治）に対応するレアルエコロギー（現実エコロジー）の立場です。

そこで、まず、グローバルに行動し、リオでの会議のような国際的機関において、国別に二酸化炭素排出量を割り当てるといったグローバルな立法を行い、違反者には制裁を課さなければならぬ。と同時に、ローカルに考え、個々人の直接の利益に反することもあるそういうグローバルな規制がローカルなレヴェルでも受け入れられるように、社会的なマーケティングやエンジニアリングを考案しなければならぬ。これが「グローバルに行動し、ローカルに考えよ」というスローガンの意味です。

浅田 いわばカント流に普遍的立法から出発して個々の意志にいたるわけですね。

リピエッツ ええ。たしかに、グローバルイズムとリージョナリズムの間には深い矛盾があります。とくに現在にあつては、一方で現実の環境問題はグローバルになっており、他方で真の民主主義はローカルなレヴェルにしか存在しないかに見える。だからこそ、「グローバルに行動し、ローカルに考えよ」というスローガンによって矛盾を打開していかなければならないのです。

### 「純粋な自然」への回帰をとなえる神秘的エコロジーの危険性

浅田 神秘的エコロジーと現実的エコロジーの区別はきわめて重要であり、イデオロギーの次元でも大きな問題であると思います。実際、「純粋な自然」に回帰しようというたぐいの神秘的エコロジーは、近代や資本主義といったものによって汚された「純粋な起源」——「純粋な伝統」から「純粋な大地」や「純粋な血」にいたる——に回帰しようという反動的・復古主義的イデオロギーと結びつきかねないし、また現にそのような結びつきが生じているケースもある。だからといって、私はリュック・フェリーのようエコロジーとナチズムのつながりを示唆したりするつもりはありません。ただ、現実的エコロジーを確立するためには、そのような反動的・復古主義的偏向を批判することが不可欠でしょう。

リピエッツ 私がこの討論の最初に述べたように、一八世紀の啓蒙主義に始まる進歩主義のサイクルは確かに終わった。そこで出てくるのが、啓蒙主義以前に回帰しようとする傾向です。啓蒙主義より前、伝統的な秩序が保たれていた頃は、人間は自然と調和し、おのおの所を得て、安定した暮らしを送っていたというわけです。

ここでまず想起しなければならないのは、啓蒙主義以前の世界が、経済的・社会的観点のみならず、人口学的観点、そしてエコロジカルな観点から見ても、おそろしく不安定な世界だったということですね。その歴史は経済的・社会的・人口学的かつエコロジカルな危機の連続であり、それこそが封建的



支配を正当化していたのです。たとえば、ペストの大流行は一四世紀半ばからの二世紀間にヨーロッパの人口を激減させたわけですが、その原因のひとつは、封建的な生産様式と社会構成体のもとでは人口増加に見合った方法で領土を管理することができなかったことでした。しかも、それによって生じた混乱は、絶えず大領主などの権力を正当化する結果となっていたのです。日本の封建時代もまた絶えず飢饉などの危機にさらされていたことは言うまでもありません。

さらに極端なケースだと、新石器時代以前には人間は豊かな森の中で採集経済による安定した生活を送っていた、というような議論も聞かれます。そのような牧歌的状态に戻るためにはどれだけのものを犠牲にしなければならぬかはさておき、そのような状態においても戦争もあれば病気もあつて安定した生活どころではなかったということ想起しなければなりません。

こうしてみると、過去への回帰は、人間と自然の安定した関係への回帰を保証するものではまったくないことが明らかになります。このような反動的イデオロギーはさまざまな点で危険なものであり、われわれはそれと戦わねばなりません。日本でも、自然の尊重が、神道における森や木の信仰と結びつけられ、それがさらに天皇崇拜に結びつくとなれば、そこには同じ危険があると言わなければならぬでしょう。

浅田 まさにそういう危険な傾向が日本に存在するというのは、あなたの推察の通りです。たとえば、九三年は伊勢神宮の遷宮の年ですが、伊勢の森こそ自然と調和して生きる日本人の心の原点だ、というような議論が横行している——それならなぜ、まだ使える建物を解体し、木を切って作り直すのか

と思いませんか(笑)。

リビエツツ そう、そのような反動的イデオロギーはバカげています。にもかかわらず、私はそれに対して徹底して厳しい態度を取る気にはなりません。そこには、歪められてはいても、なにか正しいものがある。それは、人間の生の条件——生産と再生産(生殖)の条件の外部性、という観念です。「生めよ、殖えよ、地に充てよ」という聖書の言葉によって準備され、啓蒙主義によって全面化した進歩主義においては、そのような外部性が見失われてしまう。代わりに、そこでは、人間の生存条件の基盤を絶えず拡大するために、世界全体をわがものとするばかりか、世界全体を人工化することができるといふ観念が支配的になるのです。

これはヨーロッパの具体的経験と対応しています。ヨーロッパがペストの大流行による危機から抜け出したとき、人口はペスト以前の水準を回復してさらに増加しつづけたのですが、その背後には農業生産方式の革新がありました。かつては必要な分だけ森を焼いて耕地を作っていたのが、森を焼き尽くしてしまうともう場所がなくなる。地味を回復させるにも、二圃制や三圃制で定期的に休耕するだけしかない。それに対し、新しい生産方式では、家畜のフンを肥やしにするなどして、消費した分の自然を人間の手で回復させるようになった。このようにして、ヨーロッパは、地味まで含めた自然を人工的に再構成できるといふ意識を持つようになり、外部性の感覚を失ったのです。

しかし、外部性の感覚は現代のエコロジーのなかに甦ってきています。人間はまだ自然環境を完全に認識することも制御することもできていない。あるリミットを超えると、人間にはまだよくわから

ないことがあり、よくわからないことに関しては、危険を冒さず、現状を乱さないほうがよい。この「予防原則」は、明らかに、啓蒙主義以前の外部性の観念への回帰を示すものです。さらに、そこでわれわれの知らない未来の世代の権利がかかわってくることも、外部性のあらわれと言えるでしょう。社会はその成員の契約によって構成されるというのが啓蒙主義の観念ですが、今や未来の世代の権利を脅かすような契約は禁じられているのです。かつて外部性は神の領域だった。われわれは神をふたたび導入しているわけではないけれど、自然や未来の世代をその代わりに導入していると言えるかもしれない。いずれにせよ、重要なのはそこに含まれる外部性の認識なのです。

浅田 その意味で、われわれはカントに回帰しつつあると言えるのかもしれない。ただし、啓蒙主義のカントではなく、表象不可能な外部性としての「物自体」を重視したカントにです。

リビエツツ そう、表象不可能でありながら尊重すべきなものかが存在する。それを「他者」と呼ぶこともできるでしょう。人間の手の届かない自然や、自分の知らない未来の世代を考えると、われわれはそういうものに直面し始めている。そこには超カント主義とでも言うべきものがあるのかも知れません。